

議 事 概 要 書

会議名称	第1回 伊那市誌編さん委員会
日 時	令和3年1月28日（木）午前10時30分～午前11時52分
場 所	伊那市役所 多目的ホール
出席者	編さん委員：11名（欠席2名） 事務局：教育長、教育次長、企画調整幹、担当 市長
議 題	下記のとおり
議 事 内 容	
<p>1 開会（教育次長）</p> <p>2 委員の委嘱 <市長から委員へ委嘱書を交付>（席巡）</p> <p>3 市長あいさつ 本日は、お忙しい中会議にご出席をいただき、感謝申し上げます。 平成18年の合併以来、それぞれの市町村における自然、歴史、民俗などについてまとめられておらず、ぜひ市誌に盛り込みたいという思いでこの伊那市誌編さんとなった。平成26年から始めた地名調査の事業を通して、市誌編さんの重要性を改めて感じていたところでもある。 合併から今日までの間、社会情勢も随分変わり、インターネットの普及や様々な通信テクノロジーが登場した。伊那市の歴史的な部分では、子供達が老松場古墳で新たな発見をしており、こうした新しい研究成果を掲載してもらいたい。自然編の中でも、地球温暖化により前回の編さん時にはいなかった生物などもあり、こうしたことについても研究していただき調査をお願いしたいと思う。 また、地名調査で感じたことに災害の歴史がある。それぞれの地域で起こった災害が地名に残っている。この災害の歴史についても市誌に盛り込むべきだということ、また姿が変わった観光についても触れていただくべきだとも思う。その他にも取り入れていただきたいことはあるが、委員の皆様方をお願いしながら、新しい時代の市誌という取り組みのお願いを申し上げたい。 従来の市誌はひっくり返して探しながら見るが、データとして残すことにより検索することができ、画像や音を確認することもできる。新しい方法として、こういったこともご検討いただきたい。 刊行については、合併20周年という令和7年度を目標としているが、時間的に厳しいと考える。歴史編、自然編、民俗編、どれかひとつ完成に至っているとありがたい。 こうした作業は歴史的な作業であり、どこかで誰かが行わなければならないこと。皆様には大変なご苦勞をお掛けすることになるが、ぜひご協力を賜るようお願いのあいさつとし、よろしくお願ひしたい。</p>	

<委員11名と事務局5名の自己紹介>

4 伊那市誌編さん委員会について

<企画調整幹より説明>

<質疑・意見等なし>

5 委員長・副委員長の選出について

<事務局より、委員長1名、副委員長2名を提案>

<異議なし>

<委員長、副委員長のあいさつ>

<市長退席>

◎ 会議事項（進行：委員長）

(1) 伊那市誌編さんの方針について

<資料に沿って企画調整幹より説明>

<質疑・意見等>

委員：文や写真をまとめるデジタル化は、誰か担当がいるのか。人材の候補を挙げていただき専門的にやっていただきたい。

企画調整幹：刊行に向けての編さん、レイアウト、印刷の関係などを踏まえ、業者に委託するのか専門知識を持った方に参加していただくのか等、デジタル化をどういった形で繋げていくのかについては、今後方向性を詰める中でご相談させていただき進めていきたいと思う。

委員：方針に新市の営みについての歴史や文化を未来へ繋げるとあるが、世界が持続可能な社会を求める今、危機を突き付けるようにコロナが襲ってきた。その中で構想される市誌であるということを受け取る必要がある。

コロナの原因は、私たちの生産活動や消費活動の過剰さが人間社会と自然のバランスを壊したことによるとされる。また、コロナが日本へやってきたらマスクを作れない、ワクチンも作れないという、ものづくりも科学技術も危機に対応できない遅れた産業構造だと、コロナを通して分かった。医療では、保健所が行政改革によって人が足りず機能しない。病院も行政改革によって医療崩壊を起こしている。

その中で、伊那はどうかということです。伊那の自然は持続可能か。災害に対応できるのか。私たちの消費行動や生活様式はどう変わり、自然には負担をかけていないのか。産業構造で言えば、伊那の工業、農業は持続可能か。行政改革は進んでいるが大丈夫か。平成の大合併があった。伊那や高遠、長谷の人々は、どんなことを思い望んで合併を行ったのか。合併後の地域のコミュニティは持続可能なのか。未来へ繋ぐためには、なぜそうなったのかということを考える契機としての市誌という考えがあると思う。

読み手については、これからを担う中高生とあった。グレタ・トゥーンベリさんが「この10年30年、あなたたち大人は何をしてくれたのか」と話している。伊那市の大人は、どんな社会を作るために何をしてきたのか。こういったことに答えられる市誌にしたい。こんなことをしてきたのだと、きちんとしたエビデンスを持って作りたい。そんな思いを持って今日は参加している。

委員長：今後、会を進めていく中で、シビアな意見を出していただき検討しつつ進めていきたいと思う。貴重なご意見に感謝する。

委員：世代交代が進み、各家庭に残されていた古文書といった文化的価値のある資料が失われつつある。高遠町歴史博物館でも収集を行っているが、前回の市誌や上伊那誌では使用した資料をそのまま残し行方が分からなくなったものがあるのでは。

今回の編さんでは、こういった資料の散逸を防ぐために、他市のような資料を集めて収蔵する施設の設置に結び付けてもらえるとありがたい。

委員長：非常に心強い意見。私もこういったエリアもやっていきたいと考えていた。

編さん室には、保管可能な部屋や部会のミーティングを行うにも良い部屋があるので活用できるのでは。

委員：意見としては、別冊が良い。内容などは私たち委員の想いもあるが、各委員に自分が何をできるのかを示してもらい、どんな項目を誰がやるのかという作業が必要では。

委員長：自分が担当する分野については、スケジュール上追々内容を含めて進めていく必要がある。今の意見をどう扱うのか、事務局での検討をお願いします。

委員：古文書の話については、物として残すことも大切だが、スキャンという形なら永久的に残すことができる。

不明な部分の作業も行いやすく、ケーブルテレビと共同で取材を行うことにより映像も共有でき、良いと思う。検討してほしい。

委員長：具体的なご意見だった。目的、方針、内容についての意見は次回以降改めて深める。

(2) 部会の編成について

<資料に沿って企画調整幹より説明>

<質疑・意見等>

委員長：理解を深めるための質問だが、今日委嘱された13名はまず全員編さん部のメンバーに加わる。ただし、事業としては編さん部の他に刊行部と進捗支援部があり、このふたつの部の部長は副委員長2名が担当。また、刊行部と進捗支援部の人数については、部会で

検討しながら参加していくという方向性で良いか。

このたたき台に対して、ご意見を願います。

副委員長：市誌のスタンスとしては読み手の対象が大切で、そのためには伊那市民の生活という部分を中心に触れるのかという内容の管理が重要になる。そのためには、項目の中の中の部分に焦点を当てるのか考える必要がある。方針の中に、伊那市民の生活の実態をしっかりと組み込むことが良いのでは。

長野県自体が現代史の編さんを行っていない中、伊那市で行うことにどんな意味があるのかを考える必要もある。2026年には長野県誕生から150年を迎え、2020年は戦後75年、2025年には戦後80年。2020年から30年の10年は、長野県だけでなく伊那市にとっても節目になる。こういった時期に行う事業であることは極めて重要。

また、他の市町村が力を入れている文書館や来年から施行される長野県の文書法令。公文書条例を作っている市町村がある中、伊那市では行政文書を含めた資料をどう保存し公文書館はどうするのか、この機会に考えるべきだ。

編さん部について、監修者は入るのか。2019年第2次伊那市の理念との整合性をはっきりさせ、伊那市が抱える課題も市誌編さん事業を通して展望や期待を持ってもらえると良い。例えば、ここに女性がいないというのはおかしい。委員の平均寿命も高く、老人クラブのようでは良い市誌にならない。各地域で研究活動しているグループもたくさんあるのでその方達とともにみんなで作る市誌でないといけない。学芸員が委員としてどのくらいの役割を果たすかも重要だ。

次回、項目を列挙して自分が何をできるのかを示せるよう、早く事務局の方で進めていただきたい。監修者や女性の委員については、事務局で検討してもらえるのか。

企画調整幹：早急に検討し、ご相談させていただく。

委員長：やるからには達成感を得られるような方向性が必要だと思う。縁あって集まった13名が戦いながら良いものを作ろうとやっていきたい。

公民館活動の地名調査で、200年以上口伝えでしか伝わってこなかった地名を発見した。地域の人たちが大切な小字名として伝えてきたことに、生きる人の力をふつふつと感じた。地域に生きるという、大事で重大な使命を背負っていると感じる。

(3) その他

<質疑・意見等なし>

6 その他

・次回の日程について（3月初旬を予定。候補日は、3月10日（水）・3月12日（金））

7 閉会（教育次長）